

假字本末 下卷

ホ 2  
4231  
8



門 掛  
號 3  
卷 3



假字 孫本末下卷

片假字の出來たる始也。藤原長親卿僧名明魏孫倭片

假字反切義解序不。此書の尾に仲春日花山耕雲散人

搜求舊庫反故中而手錄以歸庵借見開秘書之與藏示

推實之正軌然音義輕重濁散未盡曉而有益于後學

功不矣申歲夷則下弦阿闍梨之正一本件孫文のつ

已元和庚申於難波速川氏家許借之命筆染紙彼花の

散人明魏字耕雲作者和歌傳則應永年中出家住山

大納言山馬續孫推中納言家賢九僧明長親南山院流尹

大納言山馬續孫推中納言家賢九僧明長親南山院流尹

首蓋長親歌續君首孫集亦新葉集載右子長親南山院流尹

憂者唯親入道明魏匪直也人者也于時正德三年癸巳歲孟

耳長者親入道明魏匪直也人者也于時正德三年癸巳歲孟

○假字本末下卷

○



るを疎 到於天平勝寶年中。右丞相吉備真備公。取所通  
用。于我邦假字四十五字。省偏旁。點畫。作片假字。抑四十  
字。阿行を除音響。反阿伊字。江乎五字。下又豎列五字。と  
此乃天地自然之倭語焉。是故豎列五字。を阿伊字。江乎。横  
列十字。豎の一字。おと。横。加入同音五字。合せ。十字。此中  
音を加入せり。と。同。為五十字。を重加。て。五十字  
角徵羽變宮變徵。七聲。奇哉。世俗傳稱之。云吉備大臣。倭  
片假字反切。五十音。有。其口決矣。然後弘仁天長年中。釋  
空海造四十七字。伊呂波。補。四十五字。増。二字。以便。于女童。其體

則草書。此伊勢物語。古今和歌集。所用女假字四十七字  
也。予學和歌。樂音律。其餘力。觀吉備大臣。倭片假字反切。  
則闕無音義。竊注已意。且音義。と。五十字。此義。明。上。云  
予。趣。の。義。の。闕。て。注。さ。ぐ。あ。る。を。今。已。が。意。を。も。て。新  
に。加。へ。り。と。形。り。そ。を。本。文。に。あ。る。を。今。已。が。意。を。も。て。假  
字。音。義。方。位。を。挙。げ。て。論。じ。り。其。亦。考。全。書。以。解。片。假。字。  
說。を。あ。ら。わ。す。要。を。あ。け。て。論。じ。り。其。亦。考。全。書。以。解。片。假。字。  
全。書。と。ハ。五。十。音。圖。書。き。く。る。片。假。字。の。本。字。を。云。ふ。る  
由。り。其。全。書。本。字。を。考。へ。り。片。假。字。と。作。り。る。趣。を。解。る  
假。字。畫。解。と。あ。る。お。お。り。名。曰。倭。片。假。字。反。切。義。解。聊  
述。由。緒。冠。假。字。首。云。爾。と。云。ふ。字。か。く。て。以。を。ゆ。る。吉。備  
大臣。倭片假字反切口決を載て云  
上父字。行豎。下母字。行横。其隅生子字。

例 伊<sup>イ</sup>上父 和<sup>ワ</sup>下母 反<sup>ハ</sup>阿<sup>ア</sup>偶<sup>コ</sup>子<sup>シ</sup>  
 亦<sup>ヤ</sup>也<sup>ヤ</sup>上父 宇<sup>ウ</sup>下母 反<sup>ハ</sup>勇<sup>ユ</sup>歸<sup>コ</sup>子<sup>シ</sup>

横<sup>ヨコ</sup>行<sup>コウ</sup>歸<sup>キ</sup>父<sup>フ</sup>字<sup>ジ</sup> 豎<sup>ジュウ</sup>行<sup>コウ</sup>歸<sup>キ</sup>母<sup>モ</sup>字<sup>ジ</sup> 其<sup>シ</sup>歸<sup>キ</sup>生<sup>シ</sup>子<sup>シ</sup>字<sup>ジ</sup>

例 阿<sup>ア</sup>上父 和<sup>ワ</sup>下母 反<sup>ハ</sup>阿<sup>ア</sup>歸<sup>コ</sup>子<sup>シ</sup>  
 亦<sup>ヤ</sup>也<sup>ヤ</sup>上父 勇<sup>ユ</sup>下母 反<sup>ハ</sup>勇<sup>ユ</sup>歸<sup>コ</sup>子<sup>シ</sup>

まゝ五十音圖とく

□内五字序所謂同音五字是也。改<sup>テ</sup>乎<sup>ハ</sup>伊<sup>イ</sup>作<sup>ル</sup>於<sup>テ</sup>困<sup>ニ</sup>者<sup>ナリ</sup>、  
 空海所為<sup>ス</sup>矣。

アイウエヲ

ワ<sup>オ</sup>イ<sup>イ</sup>ウ<sup>ウ</sup>エ<sup>エ</sup>ヲ<sup>オ</sup>

ヤ<sup>井</sup>ユエヨ  
 ナニ又子ノ  
 タチツテト  
 ラリルレロ  
 ハヒフヘホ  
 マミムメモ  
 カキクケコ  
 サシスセツ

上件義解<sup>ニ</sup>片假字<sup>ニ</sup>畫解<sup>ノ</sup>とあるに載せ<sup>テ</sup>かく<sup>ル</sup>所<sup>ナリ</sup>。  
 但<sup>シ</sup>義解<sup>ニ</sup>も<sup>テ</sup>片假字<sup>ニ</sup>傍<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>本字<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>書<sup>キ</sup>添<sup>フ</sup>多<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>本字<sup>ヲ</sup>當<sup>リ</sup>り<sup>ガ</sup>とき<sup>ニ</sup>ハ<sup>ハ</sup>明<sup>ク</sup>魏<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>考<sup>ヲ</sup>も<sup>テ</sup>多<sup>ク</sup>畫<sup>解</sup>解<sup>ル</sup>り<sup>ガ</sup>その<sup>ノ</sup>本字<sup>ヲ</sup>當<sup>リ</sup>り<sup>ガ</sup>とき<sup>ニ</sup>

○假字本末下卷

四

もあるがうへよあまを要とあらねむ捨て寫さば  
さう上ふも云へるおとく此ほりふ假字反切音義假  
字音義方位ま追考伊呂波字畫解と記せるを明  
魏孫意をもて注せる説まき甚し丸誤ゆきむすべ  
とらば本書を  
見て知るべし

今按るふ吉備真備公をたあゆる多才の儒者みく續  
日本紀孫公の薨らまし所よ靈龜三年三月十二日通本  
二年二月十二日本從使入唐留學受業研覽經史該涉衆  
藝我朝學生播名唐國者唯大臣及朝衡二人而已天平  
七通本年歸朝授正六位下拜大學助高野天皇師之  
受禮記及漢書恩寵甚渥賜姓吉備朝臣と見え本朝文  
粹に載ざる三善清行朝臣孫異見封事十二條の中に

至天平之代右大臣吉備朝臣恢弘道藝親自傳授即  
令學生四百人習五經三史明法算術音韻籀篆等六道  
と見えきれむ音韻孫道ふも長きむひきりし形りそ  
のかみ唐國よ天竺より傳をまよりつる悉曇法を受  
習を來りそれよ倣ひる皇國の正しき音聲を轉し音  
位を換へて新ふ五十音圖を作りさき其對譯を用ふ  
法き漢字音の區オナジよして一同からざるが故よ更ふ當  
時皇國通用孫字音ま訓をも假借りて姑く對譯の  
き先ふ四十五字を定め其字孫偏旁點畫を省きあせ  
して簡約ある一體の字を製りたるがゆをゆ片



其表晋卿が事を。空海が性靈集為藤真川攀淨豊。遥慕聖風。遠辞本族。誦兩京之音韻。改三吳之訛響。口吐唐言。發揮嬰學之耳目。と云有り。音韻又精一かまし人なり。故推案あるふ。真備公の計らひ。晋卿を帰化とらし免。もたら學び。死して。音圖をも作。定免給するもの。形る。義解の序。天平勝寶年中に作りぬ。りとい。元海年頃もよく合ひ。きあゆる。古き史書どもを按ふる。古ハ音韻の學とを。ある事。形く。音博士とて字音を教る者。唐國人を用む。ら。是つときあえ。此晋卿をもす。形。ち音博士に任さ

終りけ。此後唐國人を任さ。きたる事。を。さ。た。あ。え。ぬ。を。真備公。が。片假字を製り。反切の法を定ぬ。へ。る。と。始りて。漸ハ漢籍讀む。あ。との。容易く。形。る。が。故。形。る。法。し。かく。て。其。音圖。を。據りて。今皇國言の。奇しく。妙。ある。趣。を。解。き。明。ら。む。る。う。へ。と。り。て。を。か。す。り。て。漢。字。よ。む。料。も。立。あ。さ。り。て。い。み。が。た。世。に。き。ら。ら。と。形。る。を。あ。や。し。た。ま。ぐ。よ。い。さ。を。く。免。ぐ。と。免。思。の。形。よ。こ。そ。ハ。何。り。々。也。上。に。引。き。る。お。と。く。續。紀。よ。野。天。皇。師。之。受。禮。記。及。漢。書。恩。寵。甚。渥。賜。姓。吉。備。朝。臣。と。見。え。る。を。按。ふ。よ。その。ら。ぬ。女。帝。に。あ。ち。吉。備。朝。臣。と。籍。を。讀。せ。奉。り。と。る。よ。は。て。此。片。假。字。を。用。ひ。て。漢。教。授。奉。り。ぬ。る。を。免。び。ら。し。く。便。よ。く。ね。も。ほ。り。き。る。

○假字本末下卷



ありともありき。恩寵の殊に深う里しよもやありけむ  
 後世又草假字を女假字女手形ども秘ひてもたらむ  
 ざまのもひ合せらるるあり。然るふそ然真備公の五  
 十音圖中。本音を四十五字ありけるを。空海圍於於二  
 音を増補し。本音四十七字よ為まりといふる傳ハ。  
 まことに然る事なるを。其を空海入唐して。始て真  
 言秘密法を受。梵字學をも傳たりせりと云へど。悉曇  
 法を精しく明ら免曉りて。舊圖を改訂して。於圍の二  
 音をも増補せるものよして。此空海の功も更ふあこ  
 免でき。但し衣惠の音の差別を素より音圖にあり  
 十五字増補圍於二字と云ふるをせぐへり。音圖を正  
 して後。伊呂波を作りと云ふは。きあといわたり。

但し件の音圖。横行はア。ワ。ヤ。ナ。タ。ラ。ハ。マ。カ。サ。と次第  
 せらる。當時はほ精しからざりしなり。又空海の改補  
 行のヲをオとし。ヤ。行はイを井とせるハ。舊より  
 空海の然改をるより。又空海は改補の説よみとて  
 て。明魏は私よものせられしるにり。いづれもなり  
 精しからば。その由ハ下さて。又真備公の時世より。は  
 やく古事記。日本紀等。以圍於遠は言れ差別正しく  
 字音をも正しく用ひ別きれしる事著明く。少も混り  
 きを。件の公は音圖よ。そは井オを載ら然ざるをい  
 る事よりと考ふる。公の世より以前のむりハ。

漢字をよむるを。一字おとふその音を正し明らめて。讀習ひ来れるものにして。悉曇法に據りてさざりる事の阿らざりしから。何れ混迷も無ありつるを。かの悉曇法よりて音圖を製するへ。あうひくくたし阿をせて。かへりて井才に差別と惑ひ阿りて。姑く闕きある形を法し。後の世と知りて。此道は習熟する上を意もて。深く難む法きよ阿らば。比等法きよ阿世は巴思ハグ。餓く梵文を採て。蒙古の字母四空海井才。此二音を補ひきるよりて。音を備りたるを。猶横行の次第ハよくもとくのはざりつるを。又後

よ考正せる人々形出来て。今の如くよを定まり阿るもの形を法し。高野寺の僧に著して刊本よせる野の講坊に在て秘藏す。大師真筆の片假字ハ。當山の形をよ。いろど其寫を得て。あきり此の證よせま。れど。いまご詳ならぬぞ待遠なるや。さて音圖の阿行よ於を属きる。又豎行の音形位置。又横行形次第。どの中昔形書よ見え。今と差するを。予が見阿らりきるを舉法し。山川阿行よ於を属するハ。源順朝臣集よ。あ。い。う。え。を。一音づ。初と終の句形上よおきくよ。あ。る。歌五首阿里。あ。天文丙午寫本の和名抄よ。一本卷首云とく。五十音を書入きるよも。阿伊烏衣於ま





かの國に古き例あるは。片假字のいどよく似ざる  
 をおもふは。古より傳ちける樂家の譜も然る體  
 のあ。又此方より片假字出来たる後のも。亦るも  
 べ々然と。古書どもの中。其書の趣より。摩魔  
 どを。廣。歷。雁。あ。を。廣。密。を。ウ。私。を。△。義。を。父。音。を。上。  
 訓。を。川。反。を。へ。あ。と。又。行。從。を。不。位。を。不。推。を。才。歳。を。戈。  
 ぬ。と。作。る。類。以。て。多。く。又。佛。書。は。菩。薩。を。サ。サ。縁。覺。を。ヨ。  
 ヲ。瑠。璃。を。王。王。莊。嚴。を。サ。ム。慶。閔。を。メ。メ。と。作。る。類。の。書  
 體。も。又。多。か。り。用。ふ。人。も。あ。る。形。り。あ。ま。ら。も。ね。の  
 流。う。ら。片。假。字。製。れ。る。意。不。相。似。き。る。は。さ。おもふは。

かくて其片假字は簡便なるより。音韻の學ハさ  
 らぬ。惣て漢籍の讀ぎぬ。其目標も用ゑるが。漸  
 る。あ。ま。ね。く。世。は。廣。ま。り。て。字。音。に。お。ま。て。ま。を。を。も。お  
 れ。う。ち。か。く。ぶ。あ。る。處。々。を。讀。む。人。の。心。々。も。字。旁  
 に。注。し。著。け。又。よ。ろ。び。の。事。を。も。書。記。に。あ。ら。は。し。と。ぬ  
 べ。く。あ。る。が。お。ほ。く。行。を。ま。さ。つ。ひ。も。今。の。お。と。く。も。を  
 あ。は。る。形。が。は。し。さ。て。その。字。旁。ふ。もの。せ。事。ハ。漢。文  
 の。書。籍。ど。も。の。今。も。遺。り。傳。ち。ま。る。を。見。て。知。る。は。し。類  
 符。宣。拙。は。天。平。九。年。六。月。廿。六。日。赤。斑。瘡。を。病。む。者。治。聚  
 身。禁。食。の。事。を。示。さ。る。太。政。官。符。の。文。中。に。咳。嗽。夫。治。使  
 或。嘔。逆。麻。と。訓。注。あり。その。か。み。片。り。あ。又。古。事。記。日  
 の。普。く。世。は。行。ち。れ。ざ。り。け。せ。證。と。は。べ。し。

本書紀の訓。印本ある古寫本も片假字もて  
とりぐと注せるが中もを以てはやくより注傳へ  
きり々むとおもたるも所也。心とぐ先て見る法し。  
かくてまゝ古人能漢文よむ。近世とを別りて一字  
能讀さばをもいみじ大<sup>オモキ</sup>事として。互<sup>カタミ</sup>に當否<sup>ヨシアシ</sup>を論ひ  
さざり所ある習俗ありけむ。師とある人の讀さば  
を秘して。字中或を字旁にどふ位を定先置て。朱點を  
施して。弟子に教へ讀し先ある事あり。さぞ其朱點の  
位能處る。片假字もて訓ざまを注せる圖を作り置て。  
弟子も授くる事としてけり。おきを點圖と稱ふ。俗に

乎古止點圖といふおきなり。乎古止と稱ふ由  
其下云ふ法し。又其中  
の四聲音訓切點懸點及點漢吳音訓引合れどを示は  
圖も有り。故師とある人の家々もて點圖異ふして。他  
門の人見て容易<sup>タヤス</sup>く知るおとを得ざりしなり。其點圖  
今も遺  
りあるが  
あるを。彼此  
寫せるもの  
あり。其を一  
ニ寫して下  
に出す法し。  
されど其を煩  
しく。かゆを  
見せむ。其  
點圖のみに  
隨ひてある  
法くも所ら  
げ。又さる  
師をたの  
まげして書  
讀むものを  
新に作る  
法くも所ら  
ぬ。さざり  
む。心々よ  
讀とりて。上  
に以てする  
おや字旁に  
片假字もて。  
其よみざま  
を注し添ふ  
る。このお  
のりから漸  
に廣まり



草假字の條に委く論ずるがおよし。さう片假字にて  
 の書きする事古書どもに見えらるる。堤中納言物  
 語。虫免の姫君の段に。あるかんきち免の御子。右  
 馬助と云ふが。帯をくちねを縫わせて。それに歌  
 をそへて。姫君に贈りける。姫君の。心字こそくはく  
 返歌。しぬる趣を心する。とある。心字こそくはく  
 よりある紙に書かふ。かかをまごの免をさうりなれ  
 ぬ。かこあんか。にちぎりあらむ。よ死極樂へ行おん。  
 おのこは。一本よく。むのすぐさ。ふくちのその  
 ことある。右馬助見ゆ。て。心と免づららる。さまあ  
 ねるふみ。おねと思ひて云々。と云々。此作者堤中  
 納言の卿也。延喜の始に頃。世ざか。まねを。一人あ

まそねのみ女子すら手習の始を。おの片假字を書  
 き。後草假字を書く。ねらひか。まねと知られきり。男  
 子をさらねる。此手習の次第。事考。既上巻。さ  
 て其片假字を習ふ。五十音をぞ書きり。は。い。ろ  
 を片假字に書かき。あ。ら。は。か。あ。を。あ。ご。書。ぬ。を。ざ。り  
 け。ま。だ。あ。か。ん。あ。に。云。々。と。い。ふ。を。ね。も。は。い。今  
 按ふる。お。その。ら。み。お。の。片。假。字。より。書。習。を。し。免。さ。る  
 た。字。體。あ。ち。た。か。ら。は。い。て。その。四。十。七。字。の。中。に。真。字  
 の。點。畫。れ。布。う。さ。ぎ。ら。ひ。て。あ。れ。だ。れ。の。川。の。ら。筆。法。も  
 意。得。は。く。ま。さ。う。ち。讀。む。布。ぎ。る。言。の。道。も。口。を。ね。を  
 た。漢。文。よ。つ。け。き。る。假。字。よ。り。き。わ。さ。あ。ね。を。ね。る。讀。う。か  
 ふ。可。き。き。より。と。も。ね。る。き。わ。さ。あ。ね。を。ね。る。讀。う。か  
 く。て。片。假。字。に。次。て。一。二。三。り。真。字。を。書。習。する。あ。ら。ひ  
 ね。り。あ。る。は。し。其。を。上。巻。に。心。算。る。お。と。く。件。の。虫。免  
 ね。る。か。の。姫。君。の。段。に。か。こ。あ。ん。か。と。あ。る。と。あ。る。白。き。扇。に。墨。ぐ



ろよ。まの手の習い。さるをさし出し。云々。とあるを  
 もて。れもひやる。後。草假字を書習ふ。はト  
 免ふ。難波津浅香山をかく。ま。洞物語國讓卷に。此書  
 を源氏物語より。取れ。男手。ちがき。よ。あ。同  
 じ。り。を。さ。ま。ぶ。み。か。あ。け。り。歌云々。真假字を  
 假字を。別。ある。字。を。女手。ふ。歌云々。草。は。ト。免。ふ。男  
 手。も。あ。ら。ば。真。假。字。を。行。草。取。ど。よ。さ。し  
 つ。た。ふ。か。と。あ。歌云。あ。し。で。歌云々。草。と。い。て。大。き。に  
 か。き。く。一。卷。よ。し。た。里。同。藏。開。卷。よ。から。取。ま。き。し。を。中  
 より。お。し。を。り。て。大。手。さ。う。し。に。作。り。て。あ。い。さ。三。寸。を  
 の。り。あ。て。一。よ。を。例。の。女。手。二。く。ど。り。に。お。と。あ。と。ふ

かき。一。よ。を。さ。う。真。假。字。を。く。ど。り。を。し。ご。と。一。よ。を  
 あ。か。ん。な。ひ。と。川。を。あ。し。で。お。川。例。の。手。を。上。よ。例。の  
 ある。を。よ。あ。さ。せ。あ。ふ。と。い。え。と。る。を。歌。の。字。を。さ。ま。さ  
 ま。に。書。て。も。て。を。や。せ。る。さ。ま。あ。ら。ま。又。狭。衣。物。語。此。物。語  
 部。が。女。大。貳。三。位。作。り。と。河。海。抄。よ。と。え。く。り。以。て。見。大。將。十  
 八。歳。の。あ。ろ。五。月。四。日。内。より。あ。う。て。あ。道。ふ。て。半。藤  
 子。集。り。居。ぎ。る。女。ど。も。の。中。より。軒。の。菖。蒲。を。一。す。ち。引  
 ね。と。し。て。歌。か。き。て。あ。と。せ。て。お。よ。あ。と。ろ。と。起。御。隨。身  
 あり。と。る。を。見。あ。る。と。あ。ろ。よ。あ。と。ろ。と。起。御。隨。身  
 あ。と。其。日。く。り。よ。硯。も。と。免。て。奉。里。た。る。し。て。き。く。う。が  
 み。よ。か。と。あ。ん。を。ふ。く。見。も。日。う。て。を。免。ふ。け。る。あ。を。ね  
 し。ね。べ。て。軒。の。あ。や。免。の。を。ま。し。ね。々。進。む。い。お。日。さ。き

おぬらせんといちせぬて。わらもの入らんところ  
きりり見よとのさあへむ。半部たうくわけきり  
て。人々あま見え侍りつと申せぬ。何人あらん見知  
り。さうり流るまやとむかりハねほせせ。かやうのうち  
つけあきうねどを。わざと御心もいらは。とさえさ  
り。さう次の文ふ。又ね目を所々に御ふみあきあふ。い  
ろいろ紙の色をさへねどのえあらぬ。あまことり  
ちらしてままあまやうにおしすりい。かきぬふ。御  
手あげあどてう。少しりの心あらん人ねいさづ  
らよかへさんと見ゆる。とさえ。此ほりも手いよ

く書ぬる趣に記しきるに。志う片假字もて歌書ぬ  
へ流る。それあみ歌もねあうり。女ふみあどを。草假字  
もて書くねらひあるを。さうもてを知らぬ女ども  
うちつけ懸想をねむ。わざとあまらぬさまをあ  
らえして。あとさらにこちへ。片假字もて。返歌  
書て流るは。きる趣なり。又同物語も。ねきあひて  
り。手まきさびねやうに。あまかあま。かひれあるを  
あるふも。あまぬ身を人のひとく。やおもひあはらむ。  
こねも情なり。風情を里。又うまかうねる御扇のある  
て云々。そのかま片假字を用ひきり。さあねむもひや

侍べし。さて片假字世よりあまねく行なれて後々歌物  
語などをねきて。假字ふて書記はよた。おろく片假字  
をぞ用ひきり々む。古寫本よかきおれ見えたるえと  
里。ねのきさきふ今昔物語集の古寫本を見ざるふ。古  
ざぬ紙の大なる雙紙よ。物がらり。大きやりに片  
假字もて書記しきるが。祝詞宣命あど書く例のごま  
く。漢字を大よ書きて。片假字を其下ふ小さく分書し。  
あを決く隆國卿の記されし本のおろくよ寫せるも  
のよして。あは昔片假字書ねほあとの例ありけ  
む。宇治拾遺物語の序よ云。世より宇治大納言物語とい  
ふもねあり。此大納言を隆國といふ人なり。云々。年

きありありて。暑さを日びて。暇を申て。五月より八  
月より。平院一切經藏の南の山ぎなる。南泉房と  
いふ所より。こもり居られり。さて宇治大納言と  
あえたり。りく。里を結ひ。日け。をり。け。あ。姿よ  
て。あ。を。を。あ。が。せ。あ。ど。て。涼。み。居。る。べ。り。て。大。あ。る。う  
ち。を。を。も。て。あ。ふ。が。せ。あ。ど。て。往。來。の。者。き。り。き。い。や  
し。き。を。い。ち。び。よ。び。ひ。免。む。う。し。物。語。を。せ。さ。せ。く。我  
を。う。ち。に。そ。ひ。ふ。し。て。あ。ら。る。ま。あ。と。ひ。て。大。き。あ。る。  
雙紙よ。か。隆國卿。長元七年。参議。同四年。七月。薨。り。ま  
り。此。物。語。も。書。と。免。む。る。年。頃。推。し。て。知。る。ま。し。  
ま。か。ん。の。お。の。こ。ね。あ。い。買。の。事。を。載。き。り。か。よ。み。て。ま。お  
た。か。の。お。の。こ。ね。あ。い。買。の。事。を。載。き。り。か。よ。み。て。ま。お  
ら。せ。と。れ。云。々。と。い。買。の。事。を。載。き。り。か。よ。み。て。ま。お  
ね。物。語。も。あ。と。隆國卿の記され。き。る。ま。お。の。事。を。載。き。り。か。よ。み。て。ま。お  
此。物。語。も。あ。と。隆國卿の記され。き。る。ま。お。の。事。を。載。き。り。か。よ。み。て。ま。お  
お。き。り。あ。と。あ。れ。ど。ね。あ。り。て。の。事。を。載。き。り。か。よ。み。て。ま。お  
ざ。あ。り。あ。と。あ。れ。ど。ね。あ。り。て。の。事。を。載。き。り。か。よ。み。て。ま。お



字書なるを見きり。歌集は免づらし。そ然たをやり  
る書ありしる手れすぢ。以みし見も然るを所れど。  
目なきがゆほど。うち見るとかふあるとある  
どころありて。以さくわげらはしあり。此歌ひと  
寫して下る出は。或人云。歌集まゝ伊勢源氏の物  
語をも片假字にて書る古筆のいさくわげ。残れる  
を見きり。事。さてある片假字の字體を。上る舉ぎる  
りといふ。真備公の製ふ。空海が増補せよを合せ書る四十七  
字ぞ。舊<sup>モト</sup>の體<sup>サマ</sup>ある法き。今世は普く用。其上  
る論へるがごとく。然るがうへふ。古く加たる書籍  
ども。いづれも用ひきるをもても知る法し。然るに

其中の異體あるを。交まるを。舊<sup>モト</sup>の字體を用ひ熟<sup>ナ</sup>  
るまふく。後々更に製<sup>ツク</sup>りきるものなる法し。其草  
も。漢字の古よりやうく。は轉<sup>オラ</sup>り変れるおもむ  
合は。但し上る云へる今昔物語集を。は。免。事を記せ  
る書どもに。異體を書きるといふ少く。漢文が訓<sup>ヨミ</sup>法<sup>ザマ</sup>  
書が訓あどに。さまぐ。異體の多かるを。もはら博  
士ぞちたる人々。心々製り用ひきりし。みぞある  
法き。かくて近むるしより異體を用るおとの漸<sup>ヤ</sup>に廢  
て。近世ふねよびて。ある事なく。お然り  
ら舊<sup>モト</sup>の字體のみきりかへ。て書く事と知るを。

おだらはくからでいせよき事なり。あを林道春主の  
 體をむをさく用らるざり例と見ゆるま其後の人  
 人もそれな倣ひてものせるが例とありきるまや何  
 むらさ猶ど又異體も見知りおく清きことざあれど年お  
 ろ古書ども其中小見ゆりきるを。舊體の字其下小  
 擧げ。ちこそきらの本字を推量し注しつけつ。但しそ  
 の片假字の古書どもも二見ゆりたるも又おれくみ  
 見えゆるも又きく一見ゆりたるも又あり已と  
 おろ書とく免置ゆるも今を今にゆりたるも其本書を記  
 いれりたり免置ゆるも今を今にゆりたるも其本書を記  
 いうとねせむ又此に載するほりも異體あるを見  
 せりとねほゆまど写とく免置ゆるも今を今にゆりたるも  
 はやく書とく免置ゆるも今を今にゆりたるも今を今にゆりたるも  
 片假字異體證文切字例

但此の書どもに見ゆるは、兼書名を  
 標する地定ま二名を載て省くるが多し。

中 尚書古本訓點 元跋了  
 江 三家秘本 元跋了  
 延 二部訓點 元跋了  
 舟 船橋環翠軒秀賢  
 菅 神代紀抄  
 百 百寮訓要  
 類 古寫本義抄成蓮院  
 真 真言密書訓  
 親 僧親鸞書  
 令 令義解古本  
 訓點

好 藤貞幹好古日録  
 延 據古書所載  
 最 訓點 王聊簡畧集  
 无 天量壽經訓  
 將 蓋片假字後院施  
 類 訓聚名義抄  
 第 古第譜  
 新 新韻集字訓  
 神 神樂歌古本  
 尊 尊意贈僧正傳古本  
 字宣交用

○假字本末下卷

○世一

語 秋 日 醫 寬 天 長 後 卜 古

古語拾遺古本  
訓點日本紀訓點  
日本書紀訓古本  
印本  
醫心方古本訓點  
寬平法皇御點圖  
天治寫本万葉集  
歌假字本蒙求目錄  
長兼寫本假字目錄  
後深草院御記點圖  
卜部類記所始  
顯昭古今集注

仁 神 万 醫 色 孝 浪 古 琉 伊

仁智要畧古本  
永仁寫本神代紀  
訓點  
万葉集注秋  
丹波雅忠著  
醫畧抄訓點  
色葉字類抄  
字訓  
同本中  
孝言本假字  
江華帖所收古筆  
浪華帖所收古筆  
古事記真福寺藏零  
本又同書應永殘本  
琉球往來訓點  
中慶貞丈主隨筆  
伊勢貞丈主隨筆  
據古書所抄

興 今 曆 見 金 催 字 朗 了 个

興福寺延年舞詞  
今昔物語集  
延曆寺宝幢院點圖  
日本見在書目錄  
古本訓點  
金澤文庫本群書治  
要訓點  
催馬樂案譜  
字訓古本  
朗詠要抄  
了  
个  
偏阿之  
偏伊之  
伊之  
旁省  
江安之  
伊之  
旁省  
尹  
旁省  
江安之  
伊之  
旁省  
草

後 園 高 道 平 密 拾 醞

後撰集片假字書  
古本  
園城寺西墓點圖  
高野山中院點圖  
道風朝臣書佛經  
訓點  
平家物語真字本  
中野用鞍  
僧法密  
拾芥抄  
訓點  
醞  
寺藏神代紀  
訓點  
假草  
同

假字本末下卷

廿







べて古あ梵ンもニのそて此ど那ン書(蒙)てべ  
 るを寫音をのをの下書出ま古色り(圓)り形と  
 る本梵又のあ梵よるせも書むそ形但ど古と  
 事中和のり字論ののり前を其免どしもく書  
 書を中差古音曇勾るのりるさ其又書得まおと  
 りののり多よりるも又頭昭の例をほきまあらざれ  
 見唇内假名三内(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉  
 とるりて各の(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉  
 卷さ各の(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉  
 々今別(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉  
 る昔の(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉  
 一物通(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉  
 つ語用と(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉  
 も集通(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉  
 ンのり(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉(ハ)ンウ喉

(ム) (三) (一) (ホ)

のも中安省牟 上体三(医)今省未 早省保(作) 之  
 み古(積)之(み)用(之)同(菅)變(之)上(ト) 同(呆)  
 用(く)无(覺)ム 變(類)訓(全)上(將) 一(同)呆  
 ふ(を)云(東) (醫)体(類) (省)類(上) (蒙) 字(同)目  
 事(牟)九(東) (草)美(草)將 (中) 同(上)朗(上)延  
 と(を)と大(同)朗(假)之(假)同(る) 未(同)尔  
 あ(九)書(寺)上(共)字(全)字(上)全(延)上(蒙)小(上)古  
 是(と)り(込) 同(草)同(草)体(馬)全(第)同(類) 同  
 り(書)る(全) (點) 体(用)之(体)同(上) (蒙) 了(了)  
 さ(け)古(体)凶 (刀) 訓(草) 万(万)  
 て(る)多(佛)之 (刀) 草(延) (中)最  
 其(を)一(經)九 (草)江 (医)古  
 鼻(後)と(み)九 (体)見 (蒙)寬  
 音(ハ)牙(々)草(將) 省(之) 万(之)  
 を(牟)り(孫)假(无) 夕 (刀) 變(令) 上(色)  
 片(牟)草(省)空(之) (蒙) 体(同) 上(蒙) 早(將)  
 假(鼻)假(字)同(省) (ト)古 (刀) 上(將)  
 ゐ(音)字(何) (語)日 (刀) 同  
 あ(に)る (同)將 (醜)日







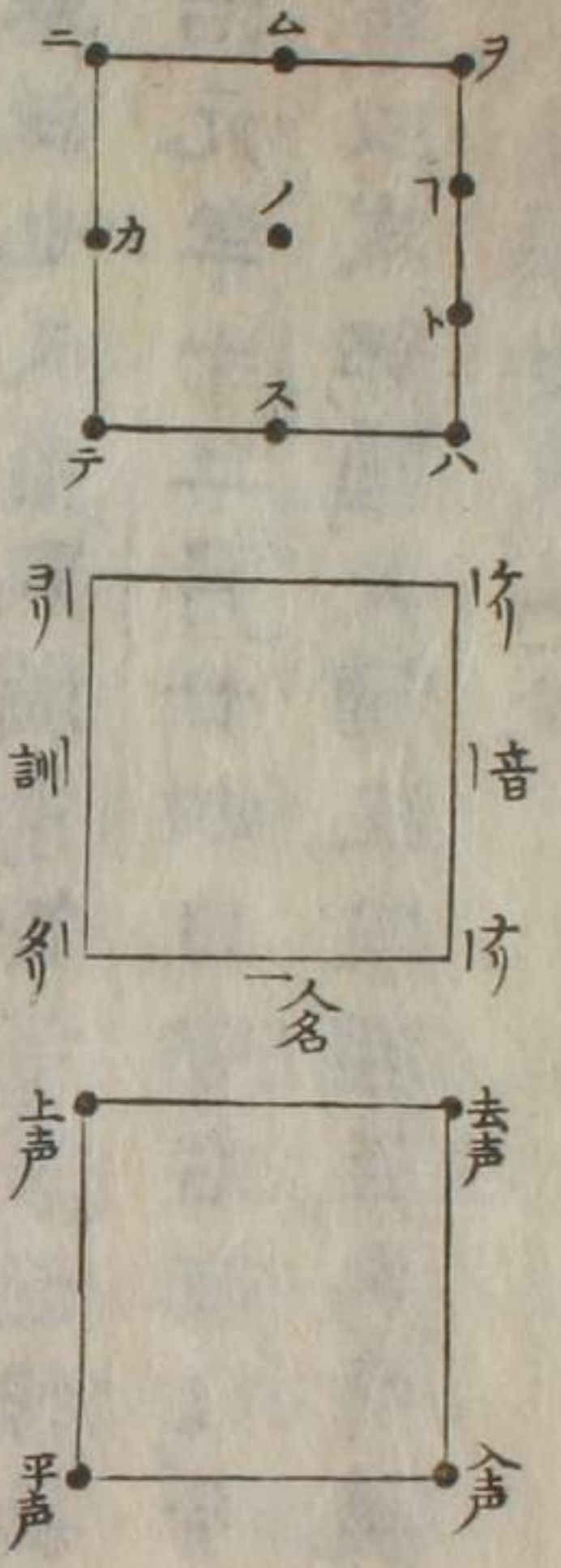
書付之無表紙。

おの東宮御書始部類記に曰。後深草院御記。永仁二年

六月廿五日。此日皇太子御讀書始也。云々。點圖角筆等。

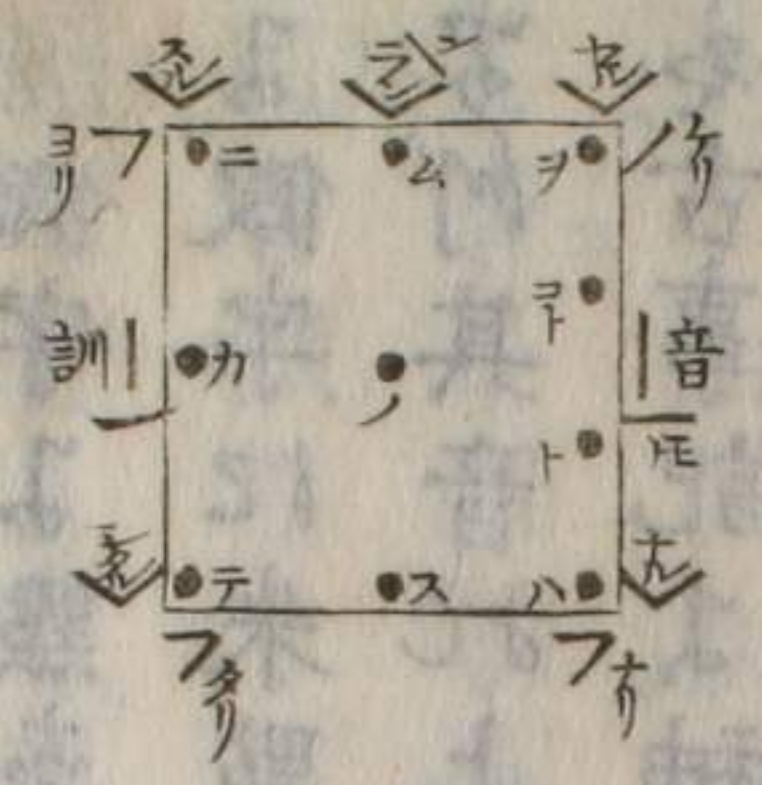
此兩物學士資宗所調進也。點圖白色紙書之。料紙一張也。一枚左方點圖三置之。草紙寸法高弘各五寸。角筆長

寸六



此寸分各方一寸也

又和漢朗詠集の點施しとる古寫本の奥よりその點圖を載せぬりとて。或人其寫傳へくる。

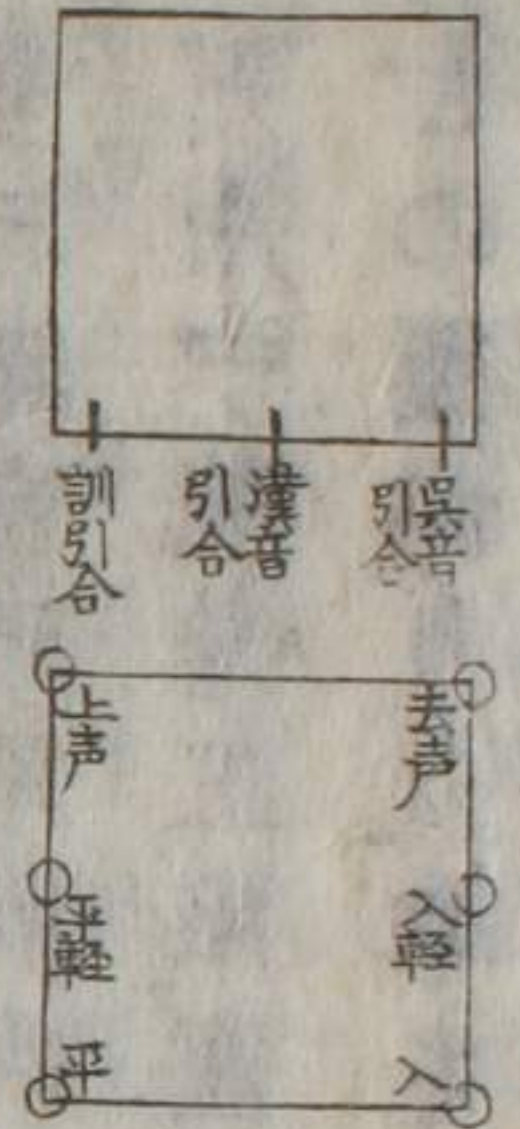


とあり。此外點圖。大學二曹。菅家江家。紀傳明經博士。清家中家。おのト家の點圖。まの延曆寺所用寶幢院點。東大寺三論宗所用點。興福寺所用唯識論喜多院點。高野山所用中院僧正點。園城寺所用西墓點。太秦廣隆寺。點。おのどの圖あり。大率を相似て各異あり。古書どもをみる。まの種々。異あり。見えたり。おの

明經家點圖之中

紀傳家點圖之中

興福寺點圖之中



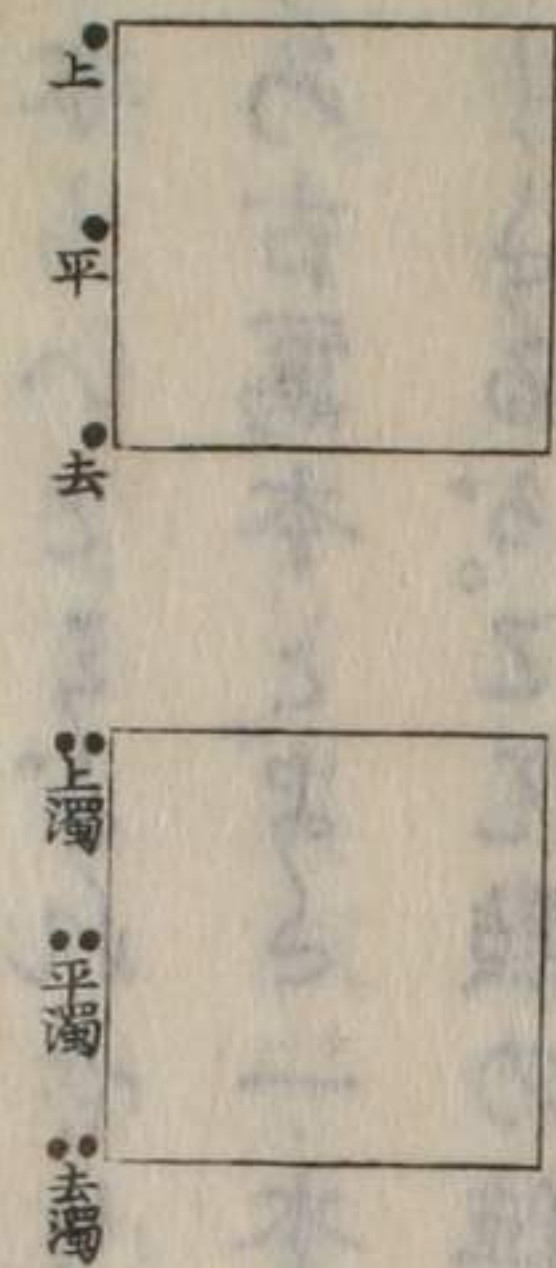
かくるさまあるを字を引合て其讀みざあ。又四聲の  
どの點圖なり。但し四聲の點位を漢國の  
例もて今も用ふるなり。其布あり。

假字に點を施して音を示しある例

古書に假字に朱點を施して音の上下を示し書るが  
あり。その其音比上下を示せる事其書し見えたるを  
ト免む。古事記に神名などの中其字の下に上去等の

字を小く注し添るとあるあり。然るハ言の連きさ  
おもて音を誤るべきところに漢國みてさざする四  
聲の目を假りてよむ音其上下を示せるものなり。凡  
て漢語の音も平上去入の四別あり。斯方の語も  
彼に准へて云へむ。平上去の三聲あり。平を上らば下  
らば平ある聲。上を上る聲。去を下る聲あり。古事記に  
平聲を注さむば依ハ。其の注さるべき語の無  
かりあるは。古の語を嚴重にして。その音の上下  
をさへに謹免る事然りき。かくて古書ども其中假  
字に點を施せるがと見えたるを。もたらそ其音の上下

を嚴重に謹める所為<sup>ワザ</sup>みても<sup>ハ</sup>免<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>。今<sup>レ</sup>の  
 ま<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>の中<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>々<sup>レ</sup>。類聚名義抄<sup>レ</sup>古  
 本<sup>レ</sup>の<sup>仁治二年</sup>に<sup>寫</sup>し<sup>る</sup>本<sup>レ</sup>を<sup>建長三年</sup>に<sup>寫</sup>し<sup>る</sup>本<sup>レ</sup>あり。三  
 字訓の片假字に朱もて  
 音點を施し<sup>る</sup>が<sup>多</sup>し。卷首に云。片假字有朱點者皆  
 有證據。名有師說。無點者。雜々書中隨見得<sup>レ</sup>注<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>。不  
 知<sup>レ</sup>追々<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>決<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>。と云ひて。を<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>音<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>重<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>もの<sup>レ</sup>と  
 ね<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>。音點施し<sup>たる</sup>と然らぬが<sup>あり</sup>。さて其音點  
 を檢<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ふ。上平去<sup>レ</sup>の位<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>て。訓<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>注<sup>レ</sup>せる<sup>レ</sup>片假字<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>字  
 お<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ふ。左<sup>レ</sup>旁<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>朱點<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>施<sup>レ</sup>し<sup>る</sup>。今<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>點<sup>レ</sup>圖<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>り<sup>て</sup>お  
 こ<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>。



かく<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>。お<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>類聚和名抄<sup>レ</sup>の古<sup>レ</sup>寫<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>殘<sup>レ</sup>缺<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>和  
 名<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>真<sup>レ</sup>假<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>。醫<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>寫<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>。第三<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>載<sup>レ</sup>せる<sup>レ</sup>藥<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>和  
 名<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>真<sup>レ</sup>假<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>。と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>朱<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>レ</sup>點<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あり。その<sup>レ</sup>點<sup>レ</sup>例<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>義  
 抄<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>し。共<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>その<sup>レ</sup>音<sup>レ</sup>點<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>。又<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>鏡<sup>レ</sup>集  
 の<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>。寬<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>四<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>。小<sup>レ</sup>河<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>印<sup>レ</sup>乘<sup>レ</sup>澄<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>。朱<sup>レ</sup>點<sup>レ</sup>  
 東<sup>レ</sup>宮<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>韻<sup>レ</sup>。墨<sup>レ</sup>點<sup>レ</sup>。唐<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>篇<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>。云<sup>レ</sup>々<sup>レ</sup>。寬<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>十<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>。尚<sup>レ</sup>成  
 云<sup>レ</sup>。墨<sup>レ</sup>點<sup>レ</sup>。不<sup>レ</sup>審<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>。朱<sup>レ</sup>點<sup>レ</sup>。詳<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>。無<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>審<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>。と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>。こ<sup>レ</sup>を



も名義抄のごとく。字訓の片假字は左旁に點施した  
りしものなり。然るにねのまが見ざる本ども、いつま  
も數度轉寫を経せりとねぼしくて。寫誤多く、點をむ  
寫漏せり。おましく左旁に墨もて點さしとるも、ゆ  
れど、心とみごまてあらぬ位トコロのもの、きれむ。據る  
よくらに、くちをいたざり。又色葉字類抄に載さ  
る神名よ。をりく墨の圈點見えとせど。こはもいつ  
たの本もいとまざれきり。こをもと延喜神名式の古  
本に據りとるよやあらむ。  
近ある古寫本と。おと一本得ざるよ。一本にを朱もて  
點さしとるが。こも點の位いとみごりあらば。普

通本ともこなり。又古事記。日本書紀の古寫本は  
中にも。をりく真假字書は歌文ウタコトバと訓ヨミは片假字  
も。朱點さしとるるところあり。ねほあをよろく見  
ゆ。點例上よ云するよ同し。書紀の印本よ。まれに黒圈  
下よ擧るもあつ同し。 顯昭は古今  
集注。袖中抄の古寫本も。とあるく朱點あり。こま  
らむ寫誤多からば見ゆ。さてその古今集の序注は跋  
よ。總載管見之所。勘愁備竹園之高覽云々。壽永二年云  
云。次に文治二年正月廿四日。依重仰差聲シラ加點カ了。建久  
二年九月五日。重下賜加點差聲シラ訖。同歌注の卷々は跋

と文治元年云々注進之。重賜差聲とあり。顯昭此注を  
某親王に奉り。重て其仰よよまて點施して奉り。ま  
其親王重て點施して賜ひたる由あり。同人の散木集  
壽永二年十月七日奉梁門教命注進之。重下給差聲了。  
顯昭とあり。但し見在る本ども其差聲の點を寫脱せ  
り。そ然加る形布差聲加點といひて。語音の上下を  
嚴重オコソカよりよりいと知るべし。書のさまふよりて。古  
尤多く然ものしをりけずを。後世よあまて。其點をた  
つと改らぬる事のごとくたもひて。寫しとらざりつ  
る本の。今々多きある流し。件のほら此書どもふも。其  
點あるを見をりしとど。今こす形よりより。又さたよ細

川、幽齋主形よりり書めぐる。古今集の抄物形。歌詞  
形中よ朱點施しぬる形を見きりた。さまむ形布近む  
りしおても。語の音を嚴重オコソカに謹む事。まこときたてざ  
り流るあり々々。かくて近き世より古學おこりて。彼  
此の大人をち。言の道々をふさ稱證して。た布あさか  
流ること形く。あきらあふありぬるた。いやもく先  
てきくたふと記よあをせくた。いあご音コエの上下の事  
をバ。古人のごとく嚴重オコソカに意得て。さごせる人形きあ  
えあぬぞくちをしきや。いうご其をちをも正し明ら  
先て。世よむろめむ人もがれ。さてあさ片假字の異體

をむ古書讀を勉むのみ心得おきて。ことさらむ古の  
み書くたとをせむ。舊モトのおくみて傳ちまゐる今の世に  
體サマを正しく鮮明アヤカる。目やすく書べきにざるこそ。伊勢  
貞丈主の隨筆に書ふ。真字と片假字とを交へ書くと  
た。口を口舌あどの口におぎれ。二を二三あどの二  
おぎれ。力を勇力あどの力におぎれ。夕を朝夕あど此  
夕におぎれ。子を父子あどの子におぎれ。かく  
混ト誤りやすた字を。文の害とある事あり。心を流く  
流きあとりり。と心ち終らるを。おこと不然ることあ  
り。

追考

かく記しおける後。天平寶字五年に書きける。最勝王  
聊簡畧集と題せり。佛書に片假字を用むて點を施し  
をるを見せり。此書吾友佐藤方定が親しき人。或古寺  
より得せり。と云々。秘藏ヒモテるを。おのまゐ見せむと  
て。暫シとて借もて来て見せしむるあり。古代の厚紙  
を書て一卷とせり。いづく舊ムシむ盡ムシて。卷舒マクハルに堪へぬむ  
りあり。ありきるを。薄紙ウスカミに二面より張繕シひて。透ス  
て見る法ホウく。さて其巻首に件ケンの題名ありて。序に我曰  
本八嶋國志貴嶋宮。謚天國押撥廣庭天皇御宇七年戊  
午十二月廿二日。自百齊國主明王奉慶佛像經教。大臣

○假字本末下卷

○世

藤我稻目宿祢始建佛法起尔戊午今至寶字五年辛丑  
 所經年數二百廿二年。下と書て。卷軸に天平寶字五年  
 と細字に識せり。序は今至寶字五年辛丑云々と云へ  
 ると同年のまむすのち此書の作  
 者自筆の形を流し。さて此書漢文がまゝに書かれたり  
 拙きかきざま多し。字体も拙けきど。さほが古様  
 て。手のまぢ當時の書にさく其本文真行の體を交へ  
 る。流きおと疑わく覺ゆ。さく其本文真行の體を交へ  
 書て。字旁るとあろく片假字も訓を注し。天仁乎  
 波を施し。あゝ反點を附せるがど。おほり今世の  
 體は異あらば。連讀の字間を附せるとあろもあ  
 さく其訓點反點。表面を多く朱を用む。裏面を本文を  
 書けがら。天仁乎波を書きり。其を本文の字列におく墨

色筆勢もて知られり。山科 此事を聞て云。或法  
 相宗の僧が談ふ。己が宗もて  
 其經疏のどを書く。天仁乎波を本文を書けがら  
 書く古實なりと云。然る例もて書るものあるべ  
 かり。さて其片假字。ねほり。今の尋常は用ふる體  
 を多くを草體にけり。免て書き。異體ふを。只  
 々。あけら。を交へ書り。あゝンと書べき處を。そ  
 くと書り。あゝのどのごと。草畧。片に。などのおと  
 き合字の體をあらば。但本文は菩薩を非  
 と作るところあり。あまよ  
 きて。ねもへむ天平寶字の頃。既し片假字を用むり  
 證なり。

○假字本末下卷  
 ○冊五終

Table with 10 columns and 15 rows of faint Chinese characters. The text is arranged in a grid format within a rectangular border.

白	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

白雲山志

卷之...

